

三河アララギ

平成二十七年

十二月号

第六十二卷 第十二号



ニューヨーク日記(110) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Whitney Museum of American Art
Blue Shoe Diaries



これは新しく移転したホイットニー美術館からの眺め。素敵なモダンな建物。ハイライン公園の南口にあってロケーションもいい! でも一番楽しみにしているのは中のレストランかも~! まだ食べに行っていないけど前のロケーションの時からあったUntitledがシェフも変わらず一緒にお引越し! 早速レビューも良いし予約入れなくっちゃ!

Beautiful summer day! Perfect for checking out the new Whitney Museum with lots of outdoor space to hang out. This is the north view from one of the terraces. It's a beautiful and spacious modern building at the southern tip of the Highline. Also, we must not forget that Untitled, the restaurant in the Whitney, came along to the new location (with the same chef) too. It opened to great reviews, I must make a reservation soon!

目次

第六十二卷第十二号(通卷七四四号)

表紙 築地場外市場	今泉 由利(1)				
ニューヨーク日記(110) Blue Shoe(2)	(2)				
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)				
歌集「スモン」					
歌集「草々」	大須賀寿恵(5)				
後の月	今泉 米子(6)				
ベテルギウス座流星群	岡本八千代(7)				
大歌舞伎	今泉 由利(8)				
美しい滝	弓谷 久子(9)				
綿雲	青木 玉枝(10)				
母の面影	内藤 志げ(11)				
喜びに	林 伊佐子(12)				
名月	安藤 和代(13)				
カモミール	清澤 範子(14)				
ノーベル賞	鈴木 孝雄(15)				
時々刻々	足立 晴代(16)				
一笑い	伊藤 忠男(17)				
瓶落し	森岡 陽子(18)				
涼しき神無月	富岡 和子(19)				
高砂百合	近藤 映子(20)				
小魚	白井 信昭(21)				
五周年	半田うめ子(22)				
国坂峠	阿部 淑子(22)				
白妙の	杉浦恵美子(23)				
明日という日	山口千恵子(24)				
	夏目 勝弘(25)				

	『ことよせ』				
		いーはとぶ(26)			
		三田美奈子(26)			
		水野 絹子(26)			
		牧原 規恵(26)			
		稲吉 友江(26)			
		鈴木美耶子(26)			
		吉見 幸子(27)			
		牧原 正枝(27)			
		岩瀬 信子(27)			
		石田 文子(27)			
		森 厚子(27)			
		山崎 俊子(27)			
		東洋大学(28)			
		弓谷 久子(30)			
		遠藤 脩子(30)			
		森岡 陽子(31)			
		今泉 由利(31)			
		山元 正規(32)			
		今泉 由利(32)			
		川井 素山(32)			
		小柳千美子(33)			
		重野 善恵(33)			
		田中 清秀(33)			
		森山 陽子(34)			

		山道 京子(34)			
		柳田 浩一(34)			
		米田 文彦(35)			
		植村 公女(35)			
		田中 清秀(36)			
		丸山酔宵子(38)			
		米田 分彦(40)			
		『酔いの徒然』(44)			
		本からのあれこれ①			
		ある自然科学者の手記(43)			
		絹の話(61)			
		短歌に詠まれた茂吉 五十一回			
		鮫島 満(46)			
		楽しい時間(37)			
		山本紀久雄(48)			
		『楽しくマナー』⑥			
		辻 照子(50)			
		『歴代天皇御製歌』(四十六)			
		貫名海屋資料館(52)			
		雑草			
		夏目 勝弘(54)			
		『氷魚のことから』(179) 岡本八千代(55)			
		編集室だより(二〇一五年 十月)			
		三河アララギ(56)			
		ことのはスケッチ(44) 今泉 由利(58)			
		和菓子街道(110) 平松 温子(59)			
		お知らせ：三河アララギについて(60)			

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集「御津磯夫歌集」

世界より集まり百分の一秒さへきそひ争ふ人類人間

わが一生の執着執念は説ならず御津に今あり引馬野安礼乃崎

今年竹すでに交りてひといろにひとに向きになびく風の竹むら

ベッドにてはつはつに書きとどめしを我は清書す媼の心になりて

秋晴れの空すみわたる日となりて思ひはかなし光のいろも

高砂百合の青き莢実の青よしとつまはよろこび幾度も言ふ

心ここにあらざる日々のつづきつつ秋虫の音の絶えし中庭

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

仮縫の黄の糸屑の未だ残るシルクのスーツ今朝も着て出づ

乗降口ふたぐを憎み押し押しして乗りたるわれも入口に立つ

あかときの目覚めのしばし高鳴れる吾の鼓動をわが耳に聴く

歌集 「草々」

今 泉 米 子

上向きに木芙蓉は今日の花を閉づ咲きゆくよりも濃きくれなるに
木芙蓉の夕べ閉ぢたるくれなるをとりて染めにき三年前に

伊吹山の下の朝虹くぐりゆく眼を病みてゐる吾が子に逢はむ

声にならぬ唇の言葉に母われを言ひしといふよ甦り来よ

酸素テントの中に執りたる吾が子の手。ピアノ弾きぬしかたき指先
意識なき眠りつづくる吾が子の辺またあたためる重湯さめゆく

病棟の屋根の氷雨にゐる鳩を子の見て言はむ日をわれは待つ

春となりしことも知らず病む吾が子よ庭の土筆のとき過ぎてゆく

ネッカチーフは水玉がよし記憶まだ返らぬ吾が子の伸びたつ髪に

二見の道岐れ来し古の姫街道竹藪の中に消ゆるばかりを

後の月のち

蒲郡 岡本八千代

後の月のち今宵は旧曆十三夜わが六疊に光りが届く

後の月光りさしくる書屋にて今宵より読まむよ「赤彦とアララギ」

後の月今は東の空にゐる恬淡てんたんとしてただその光りは

うら若き女教師二人赤彦に訪れて語らふアララギの歌を

若しわれが赤彦時代の教師ならば如何にかしらと思ひつつ本読む

本々の中に囲まるる幸せをつくづくと感ずるこの秋の夜半

イタリアに旅せし友もさぞかしや同じき光りの月みてをらむ

さりげなく今宵の月の下にをり友はイタリアわれは西浦

ぬくぬくの秋のひかりを背に受けつつ庖丁を研ぐけふのわれかな

夕映えの中を生塵なま捨てに歩む足元に触るるアカマンマの花

ペテルギウス座流星群 東京 今泉 由利

もうすぐに星の寿命の尽きるとふペテルギウスの赤色憂ひ

642光年隔つるといふペテルギウスほの赤色の心もとなし

ハレー彗星の残しゆきたる星屑の光るひとすじ流るる星よ

放射点頂度頭上に至るとき出会はむと待つ流るる星を

地球なる一〇〇km上空に星くず燃ゆる流るる星と

ほかほかと蒲がまの穂絮ほわたにくるまれよむかしのことを思い描くよ

穠田ひつじだにまたのみどりの萌えいでてお米の国をしばし見守る

豆柿の青実黄色実拾ひあぐ柿渋とらむ洪染めをせむ

武蔵野にうけらの花の咲きにけり駆け寄りて見るその桃花ももそめ褐色を

新米のひと粒ひと粒噛みしめて喜びになる慶びになる

大歌舞伎

豊川 弓 谷 久 子

心づくしの招待券が届きたり久びさ今日は芝居見物

舗道に沿ひて幟はためく錦秋の顔見せ興行大歌舞伎

華やげるロビーの隅に開幕の刻を待ちをり心ときめく

「年の瀬や水の流れと人の身は」待つてゐましたこの名調子

歌舞伎役者の一生を送りし我が兄を憶ひつつ観る「松浦の太鼓」

姉ちゃんと我を慕ひし甥なりき逝きて十三年今日は命日

いのこずちせんだん草も伸び放題姉亡き庭の草を刈りをり

杜鵑の花咲きてをり庭隅に地味なのがよし目立たぬが好き

初木枯しが硝子戸激しく叩く夜は一人暮しの妹を思ふ

鉦叩きの声が何時しか絶えてをり音無く雨の降り出だしをり

美しい滝

新城 青木 玉枝

毎夜さめて物音一つ聞こえない静けさよりも侘しき部屋に

山里の生活は始めての事ばかり都会のリズムに帰りたい夜々

何時迄もこの嬉しさを胸にしまひ今日のひと日も暮れてゆくなり

今日は又滝見物に一人旅バスは運転手さんと私だけ

谷川のしぶきを頬にうけながら橋の上には運転手さんと二人だけ

三時間に一度しかないバス行きも帰りも運転者さんと二人だけ

こんなにも美しい滝の音今日のひと日の忘れじの旅

山里に二年目の夏が来る波打ちよせる砂浜恋し古里が

青き草に玉露光る朝明けの庭のめぐりは足裏に心持良し

手押車ておしたより開け行く山里ながめつつ生活たつきの煙あちらこちらに

綿雲

豊川 内藤 志げ

膝をつき薯の茂りの蔓を刈る運びやすく切れ目入れつつ

本宮の彼方に筋立つ白き雲時の間にして低きも一筋

足許をきずかいながら歩みしを今日から視線を遠くしよう

鳴声に見上ぐる空は綿雲の白々廣し静かな日の暮れ

芝の上蟲く見ゆる青大将もぐらの穴潜りゆくなり

揺らぎある古竹照らしつつつるべ落しに今し消えゆく

夕の日の風にゆらゆらと沙羅の葉の障子のかげ絵たのしみてゐる

沙羅の葉のかげ絵たのしむ刻の間につるべ落しの陽にぼやけゆく

野ぶどうとザクロとアロエとを焼酎に大小七個の瓶に

窓々を開け放ち一時の暑さを凌ぐ十月の土用

母の面影

岡崎 林伊佐子

田の道に彼岸花さく花の時母を看とりし幼な日忘れぬ

伝染病に次つぎ家族を失ひて途方に暮れし無医村の里

終戦後七十年経ても年若く逝きませ母の面影忘れぬ

母の亡き幼な日おもふ弟を父と育てき食糧とぼしく

飽食の世にながらへて余りたる野菜を捨てる自家栽培は

町に住みふる里の世相よごまを残さむと帰省して詠む過疎の僻村

終戦後生計たてし渋柿も高齢化して村人とらざる

「寒狭川」を出版してより詠みし歌生きた証に残さむと思う

沈む陽が隣りの町空染めるころ農仕事終えて帰宅を急ぐ

子や孫に囲まれて住む幸せよ健やかにして傘寿となりぬ

喜びに

豊川 安藤 和代

喜びにあふるる今日よ杖なしで夫が百歩を歩きたる朝

ひととせを入院生活した夫はパジャマは売る程あると苦笑す

長生きはしたいと思う日そうでない日くり返しては一年の過ぐ

旅行にも外食にも縁なき日びなれど病夫の笑顔に心満せり

無理するな体いへと娘は言えど無理がなければ暮れぬ一日

スマップと嵐が好きですこの秋の新色ルージユそつとぬりみる

台風の去りたる朝の大空は「お母さん」と叫びたい青

幼な子を抱く様にして白菊を嫁に会いたしと急ぐ彼岸会

窓に見る稲の色付き日び変りいよいよ秋は深まりてゆく

夕焼けが東の空まで染めていく心の中まで明日は晴天

名 月
春日井 清 澤 範 子

名月と満月とまたスーパームーン家族みたり三人で鑑賞しました

大根と里いもコトコト煮上げたり今宵満月木犀香る

七十七歳若くあらむと朝毎に吾口紅を引く色淡くして

暑かりし夏もやうやく治まりて冷え込みし朝母のセーター

喘息も治りて厨に立つ吾にカナカナ蝉の声聞こえつつ

押しポタン押して神社に参拝す色づき始む桜紅葉は

本を読む時も厨に立つ時も背曲り来る時どき背伸び

肉も野菜も撰らむと肉ジャガ煮上げたり食欲の秋残さず戴く

雨上り露を含みて側溝に生えゐる苔は緑に光る

残暑ある今日なり堤防歩く道ふと見つけたり萩の紅花ベニ

カモミール

沼津 鈴木孝雄

ベタ風の駿河湾見つつ散歩する明日の暴風誰か想わん

カモミールの芝生作りに草を引く甘い香りをお礼にもらう

お隣のコンビニ店がのれん下すジワリと進む地方の衰退

オクラの実すつかり伸びが遅くなるもう富士山に冠雪の見ゆ

薄黄色つぼみ日に日に膨らみて今まさに咲かんイソギクの花

自動車の高齢者向け予備講習自主返納を促されてる

コレステロール正常値に減少す肉より鯖のDHAが効きぬ

静浦のカラスはみんなメタボ気味こぼれアミ餌を食べすぎるなよ

防波堤を取り囲むように游漁船海と丘から太刀魚攻めらる

トマトの実秋というのにまだ青い抜くか迷ってはや霜月に

ノーベル賞

東京 足立晴代

朱熹シュキイウ曰く一寸の光陰軽むず不可ニユートリノの重さ解かりてノーベル賞

万人の不治の病を治し得て世界に輝く日本の偉人

地下深き世界に稀なる研究室重さなしから有りとなりけり

大小様々台風の襲いかゝりて世界中何処も同じ災害のあと

穏やかな川面見る間に増してゆき濁流の渦人家沈みぬ

濁流に沼となりたる畑中に人家の窓より白き布振る

鬼怒川きぬも名の如くして荒れに荒れ過ぎ去りし日の姿ながし

秋空に鳥囀ずりて穏やかに台風一過の朝となりけり

花水木赤き実ありて紅葉ばの秋の陽あびる小春日和を

菊の花台風過ぎて秋の陽ひを心ゆくまであびておりけり

時々刻々

大阪 伊藤忠男

日ごろから時に追われて過ごす日々時楽しむはいつの時なり

過ぎ去りし日々に思いを馳せるとも誇れるものは何があるのか

赤とんぼ追いかけ子らが飛び回るのどかな日々がた続くこの里

数独を楽しむ母よ衰えの激しこの頃九十五歳

母介護私の世話に明け暮れる妻の日々には感謝のみ

イチジクにりんごにミカン柿に栗目移りするや果物の月

今日内科明日沁尿器次は外科病院梯子も歳取りた故

手作りのパンはまだかと見る時計酵母が香る空腹の時

有松の紋りに挑み縫い加工布ではなくて指に針刺す

からくり目奪われし秋祭り曲がる街角山車勇まし

一笑い

東京 森岡和子

窓辺には半月映る秋の空兔の見ゆる満月待たる

十五夜を迎へて一人月見の茶月餅の栗丸くころつと

虫の音に居間の窓からスーパームーン横のテレビは愛の唄流れる

何処からかほんわか甘い香り来る木立の中に金木犀の花

上総地の古刹霊場遍路絡みち心安らぐ道端の花

ふと頬に感じる風の変り行く山の葉赤く祭りも終る

三味の音に御題は秋太刀魚で一笑い秋色に成る高座座布団

秋の蟬確か昨日は聞え来た今朝は聞えぬ消へしか命

人として生きる遺伝子解析にカンブリア紀に生物現わる

目を横に土手には秋の草の花彼処にも有るはず微生物の菌

瓶落し

東京 富岡 和子

記録せめ熱暑つづいた八月を無事に暮せし同期会合

友の顔同窓会は又別でしみしわ見ずにおしゃべり楽し

昇り行く名月しかと見ていたく歩き巡りの都会の家並

健診日のこせし母の半纏を羽織るもうれし評判の良さ

取り壊すことの決まりし家にして柿の実たわゝいにしえを知る

野菊咲き淡く濃く蝶シジミは舞い添い合いてムラサキワールド

あざやかに遅れ咲きつぐアサガオに寒露のあさの何やら楽し

咲き続く夏草惜しみ手入れする小菊と和してなんとも素敵

空から揺れるブランコ残して児達去りお帰りチャイムの瓶落し

香草の中に居座り庭仕事年毎遅々と木枯し吹くる

涼しき神無月

名古屋 近藤 映子

彼岸過ぎエレベーター開けば金木犀玄関先に香り流るる

神無月日本二人のノーベル賞受賞のニュース続く一日

十月五日日本の医学者ノーベル賞の受賞のニュースの嬉し

日本のノーベル賞受賞者は二十四人とのニュースほのぼの

超大型台風23号は北海道稚内を通過し行くか

吸入の薬は時々忘れがち娘は吾をきびしく注意す

秋くれば孫の七五三のお祝いの話題に娘と一時あれこれと

秋晴れの続きてわれは乾燥の日々のうがいの忙しき

秋晴れの此の八階のベランダに布団干したり日陰に亀二匹

時習館六回生の同窓会出席確かむ電話も嬉しや

高砂百合

豊川 白井信昭

涼しげに水面に浮かぶ水蓮の清楚な花がさがらの森に

地境のフェンスを越して半日陰高砂百合の今年も違わず

ざわざわとみ社の杜吹き渡る十八号の小笠原の風

ようやくに十七号の遠く去り台風一過の朝の青空

半年ぶり息子戻りて片付きぬ今日が誕生日八月三十日^{みそか}

いく度も移植し庭のさるすべり待ちし開花日八月三十日

爽やかな風入来る二階部屋暑さ忘れてひととき昼寝

堤防の今宵明るく潮満ちてまんまる白しスーパームーン

爽やかなカラフルな服にはずむ声児童らの列農道を来る

門口の我に次々と声かける「こんにちは」の元気な笑顔

小魚

新城 半田うめ子

西川のさらさらと水の流れをり小魚の多くそよぎあるなり
川辺にて美しき花の咲きをりぬ眺めつつ歩く友と語らひ
やさしくて親切なりしひふみ様いづくかへ行きし会へる事の無し
静かなる庭の昼さがり一人すくみて草を抜きをり
柿の木の前畑にありて実の多くからすのさわぎつつきつつをり

五周年

横浜 阿部 淑子

木枯の一番吹いて木々震え人の上着はセピア色へと
散歩する小犬に会いて「可愛い」と話しかければ振り返り行く
ふと着けてテレビに映る銀河星オーケストラは宇宙空間
骨盤を伸ばす体操繰り返し伸びた姿はジャツギリとして
利用者の幸せ祈るスタッフの支え実りて満所の五周年

国坂峠

蒲郡 杉浦恵美子

我が庭にひともと咲ける秋明菊花の暦の我が誕生花

十月の我が関心は秋明菊と四つ生りたる柿のことのみ

於大の方乱世を生きて晩年は背には五井山彼方は三河湾

於大の方縁の寺が消失す奇しくも家康四百回忌

国坂峠五井山麓の東側御津へと続く古き山道

祖母せんも於大の方も尚のこと国坂峠を越えしと思へば

国坂峠越えて蜜柑の段々畑彼方に竹島抱く三河湾

国坂峠越えて見晴らすふるさとの西浦半島なだらかな影

フエイちゃんが母になりたりクロチルデ抱ける写真が添付してあり

クロチルデ会いに行けるはいつの日か今の我にはフランス遠し

白妙の

豊川 山口千恵子

白妙の花かをりゐる夕まぐれ秋に花咲くわがダチュラ

つややかな円ら実小枝にびっしりと紫式部庭に枝垂るる

香りゐし花いつしか散りはてて金木犀の木しづまりぬ

稲の穂も色付きはじめ垂れはじめ田の原広々秋深みゆく

はなやかな花枯れはてし彼岸花その茎のもとに青葉出ではじむ

かすかなる羽音させつつ頬にくる秋の蚊うるさし眠らむときを

足うらに踏みし感触はカタツムリ雨の上がれるとび石の上

種落とし籾殻まきて水をまく玉葱芽生えよ揃ひて芽生えよ

薩摩芋の出来は如何と一株掘る紅色美しきベニアズマ芋

ちちははの夢を見てゐて目覚めたりしばらく寂しき思ひしてゐる

明日という日

豊川 夏目勝弘

連日いの暑さに目覚めし夜夜多しセンダイハラミタの言葉を思う
耐えにたえ今日より九月生きてゐる常となりたり耐えゆくことに
台風の風に揺さ振られしネムの木に淡き紅の帰り花一つ

雨の日の多き今年の九月なり松茸でると喜びし遙か

生きゆくは並べては耐えるが常なりと思へるときは先の短かし

我が庭の白きヒガンバナもはや末枯れ動けば汗ばむ今日の昼なか

秋祭りのメ縄の準備今日終へぬ盆より詣でぬ墓にいでゆく

平凡にただ平凡の暮しにも満ち足ることの楽しさのある

脈搏の六十前後のつづきをりのんびりゆこうゆっくりゆこう

明日という日はなけれどもされどあると仕事の手順めぐらしてゐる

『いじよとせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ひとり居の自由不自由五分五分か同居のはなし未だ決めかねて
けふもまたメビウスの帯たぐるごとものはぬ夫の写真のまへに

三田美奈子

弱りゆくウーパールパー救はむと孫はただただ右往左往し
築山の小さき墓標に雨が降る幼きままに逝きしペットの

水野絹子

月明りにさそはるるまま庭に出づ見上ぐる空に今宵の名月
中学生の孫の運動会を見に來たり大旗振りぬし姿見つけし

牧原規恵

離れ住む子等想ひつつ夫と歩く彼岸花咲くこのせこ道を
見慣れたる景色の中を走りゆく最終バスにはわれただ独り

稲吉友江

庭に咲く野ポタンの花いただきぬ手折りて一枝わが掌に
瓶に挿しし赤紫の野ポタンは早くも散りたりひとひらふたひら

鈴木美耶子

大丸の玄関ロビーに花生けぬ鉄線の紫風に揺れつつ

チャージせしマナカカードを使ひたり我は五日間通勤電車に

吉見幸子

野分さり静まる庭に虫の声幾年ぶりかの鈴虫の声

雨あがりいっせいに舞ふ秋茜ふはりすいすい赤みはこれからか

牧原正枝

暑かりし夏もすぎたり朝夕に吹く風秋の新しき風

秋めきて今日は出したり床の間に「四季の花」の絵萩の掛け軸

岩瀬信子

草深き山路分け入り知多の宿へ沢蟹一匹道を横切りぬ

青と赤点滅しつつ飛行機ゆく空港近き宿のみ空に

石田文子

ごんの里の赤き彼岸の花見ればかつて授業せし日々浮びくる

デッキより吾子見送りし帰り道空に淡々うろこ雲流れて

森厚子

四姉妹の母らそろひて食事会よはればれの顔に送られて帰る

夕暮れて帰りし夫にさそはれて見上げし空にオレンジスーパームーン

山崎俊子

現代学生百人一首

東洋大学

鷗外さんちよつと脳ミソお借りしたい三月中には返しますので

星美学園高等学校三年(東京都) 生垣萌々子

試験前ノートのコピー飛び交わずスマホで写メし難問解決

聖心女子学院高等科二年(東京都) 鈴木麻未

相談に乗ってと言われ乗っている自分のことは分からなくって

専修大学附属高等学校三年 黒澤雄登

誰よりも響く声援その声ははりきる父の応援だった

中央大学高等学校一年(東京都) 小野寺真菜

御嶽山噴火で気付く当り前人も地球も生きていること

中央大学高等学校二年(東京都) 小岩瑞季

部活後に男二人の帰り道さびしさ残す二本の轍

東京農業大学第一高等学校三年 池田隼人

席ゆずり静かに聞こえた「ありがとう」疲れた体少し和んだ

昭和女子大学附属昭和高等学校一年 川上乃愛^あ

大学で己について哲学す未だ自分をわかることなし

東洋大学一年(東京都) 永友 涼

液晶に絶えず目をやる人々の心の富はいかほどばかり

東洋大学二年(東京都) 小林雅隆

おしゃべり中ぼろり方言口にして離れて暮す家族を想う

東洋大学三年(東京都) 谷内花奈子

私の一首

くちなしの葉にしっかりと止まりをり未だ新しき蟬の脱け殻

弓谷久子

三河アララギ賞を戴き身に余る賛辞を戴き三十年前に御津先生から戴いた三河アララギ賞のあの日の感激がよみがって来した。厳しいけれど優しい御津先生にいろいろな事を訓えて戴きました。

不肖の弟子であつたけれど御津先生の門下生である事がどんなに誇らしかったことか、歌はこころ歌はしらべと噛んで含めるように訓えて下さつたあの頃がなつかしく思い出されました。

「ありがとうね」と優しく言ひて微笑みてリハビリ室を出でゆく嫗 遠藤脩子

股関節が痛くて通う外科医院のリハビリ室で治療を受けていますと、二人の若い女性スタッフに「ありがとうね」と声を掛けて帰ってゆく小柄な老婦人に時折出合いました。その何とも言えない穏やかな、ゆったりとした雰囲気にとても心惹かれました。素適なおかただなアと、尊敬と憧れを込めて見送る作者が感じられましたでしょうか。

作者の立ち位置がわかる歌を、と心掛けてはいますが、いまだ、なかなかです。

桜の葉小さな小さな公園のペンキ塗りたてベンチにパラリ

森岡陽子

何時も何気なく歩いている駅に向う道の脇に小さな公園がある。その真中にただ一本の大きな桜の木。夏は日陰を、秋は美しい紅葉を楽しませてくれるが、冬に成ると近所に住んでいる方々は毎日の落葉の掃除に追われる。しかし子供達にはそんな落葉も楽しい遊びに。落葉を踏んでガサゴソ音を楽しみ、すくっては頭からかぶっている。所々剥げかかっていたベンチがきれいな黄色に塗られ、ペンキ塗りたての注意書があつたが、桜の葉はそんな事は知らず風に乗ってパラリ。ベンチの上に10枚程の葉が落ちていた。

描かむよ釣舟草に寄るときにトラマルハナバチやはり来てゐる

今泉由利

奥多摩に滞在していた早朝、近くの釣舟草の群生をスケッチしようと近寄った。トラマルハナバチが、私より先に来ていた。

帆掛け船を釣り下げたような釣舟草の花の後方が、長くくると筒状になっていて、ハナバチの長い吸い口の形をしている。花が先かハチが先か自然って、すごいことが起っていることにびっくりしながら、その花の形をしっかりとスケッチしたのでした。

『俳句』

濃く淡く燃えて楓の照葉かな

山元正規

山の色照り翳りして秋深む

秋深し疎林透きゆく風の音

一献は三献となる秋深し

今泉由利

豆柿のことさら小さし黄実黒実

自らの体温ほどのぬくめ酒

菊人形六方踏みて薫りけり

川井素山

月白や河口にかすむ鳥の影

小芥子の里秋駆け足の錦かな

古民家の柱に寄りて走り蕎麦

小柳千美子

秋日和檜チップの遊歩道

伐採の幹を巡るや秋の蝶

秋深む米磨ぐ水の温きかな

重野善恵

里山の紅葉の前静かなる

稲雀案山子鳴り物何の其の

銀テープ巧みに抜ける稲雀

田中清秀

さやさやと銀の風吹く叢薄

虫喰ひも啄むあとも柿熟す

靴裏の銀杏ともに寺参り

森岡陽子

大雨に崩れし山も薄紅葉

秋澄むやお玉が池の名残札

葉は虫に食はれ放題秋の薔薇

山迫京子

本を読む少年像や秋高し

群なして翔ちては戻る稲雀

深緑くすみを増せり秋の山

柳田皓一

見え隠れ流線形の稲雀

波頭白さ眩しい秋の海

秋澄むや将棋の駒の高き音

米田文彦

幼子も真似て手締めの秋祭

ほこほこと箸の掘り出す栗ごはん

毘の旗の駆けし山路や蔦紅葉

ひとり居に鳥の鋭とき声秋深し

平明に語る母なり良夜かな

植村公女

秋うらら文庫本読むホームレス

独り居に届く野菜よ柿二つ

かさね吟行会

「外国人墓地とみなとの見える丘公園」十月

田中清秀 吟行記

山元正規 選句

嘉永七年（千八百五十四年）三月三日ペリー提督は五百名の将官・船員と共に横浜村（現在の横浜市中区の日本大通り付近）に上陸した。その乗員の一人ロバート・ウイリアムズという二十四歳の二等水兵が死亡し、この水兵の埋葬地と合わせてアメリカ人用の墓地を幕府に要求した。協議の末、横浜村山手の増徳院の一部を提供することになった。ペリーが希望するみなとの見える地にも合致し、これが横浜山手の外国人墓地の始まりとなる。

平成二十七年十月九日、今月のかさね吟行会はこの外国人墓地、山手西洋館、みなとの見える丘公園のある横浜山手地区で行われた。天候は晴れ、空は青く澄み渡り心地よい秋風が頬を撫でて清々しい。

先ず、桜木町駅から「あかいくつ」号という観光バスに乗り赤レンガ倉庫や日本大通り、元町中華街を経由してみなどの見える丘公園まで約三十分の観光スポットの

周遊から始まった。市街地の異国情緒をバスの車窓から垣間見ながら早速に一句出来あがる。

秋晴や百円で乗るシャトルバス

京子

秋晴れの港に古ぶ赤煉瓦

千美子

赤煉瓦燃やさむごとく秋日濃し

正規

安政五年（千八百五十八年）の通商条約の締結により、山下町を外国人居留地として開発した。この地域には外交官や貿易商の邸宅が多く建設され、今回訪れた「エリスマン邸」はスイス人の貿易商で生糸の貿易で財をなした人の私邸。設計は有名な建築家アントニオ・レーモンで暖炉のある応接間、庭を眺めるサンルームなど立派な建物である。また、隣接する「ベリック・ホール」はイギリス人の貿易商の邸宅で現存する西洋館の中では最大規模、設計はアメリカ人のモーガン氏でスパニッシュスタイルの建物、広いリビングやダイニングルーム、タイル張りの床など建築学的にも価値あるものとなっている。

外人墓地ふる里偲べ秋の草

善 恵

ユニークな電話ボックス木の実降る

素 山

行く秋の異国に眠る墓の列

文 彦

昼食はえのき亭という喫茶店でサンドイッチを注文し店先のテラスでコーヒーや紅茶を飲みながら簡単に済ませる。ただ、なかなか出来て来ず待ちながらの句作には貢献はしたが集合時間に遅れる羽目となった。

その後早足で、みなとの見える丘公園に向かい横浜港の景色を眺め、さらにローズガーデンを通り抜け句会場の神奈川近代文学館へと向かう。

蜻蜓とぶ丘の上なる異人館

陽 子

秋深む喫茶流るるピアノ曲

清 秀

質量のしつかり見えて木の実落つ

由 利

文学館には夏目漱石、北原白秋、志賀直哉などの残した書画が常設され、また、神奈川ゆかりの文学者たちの生涯や代表作を紹介している。時間がなく見学に至らなかったのは残念である。会場は二十名収容可能な広々と

した新しい畳の香りがする上品な和室である。

今回は囁目五句出しながら立派な俳句が揃ったのは観光地での開催と文学館という会場の影響が大きいかもしれない。句会は予定通り二時間ほどで終了、見残した公園周辺をさらに散策し横浜地方気象台やアメリカ山公園へと進みエレベーターで元町中華街駅に直行する。横浜での開催ということで、さらに中華街まで足を伸ばし飲茶を食べ紹興酒で乾杯することとなった。秋の日の吟行会は満腹のうちに無事にお開きとなった。

「ハオチー ジョングオツアイ ヘン」

■かさね吟行会■

日時 十二月十一日(金)

場所 新宿御苑

集合 新宿御苑大木戸門 十二時半

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（四四）

丸山酔宵子

『ひな鳥のから揚げ』

食い意地が張っているのか、どういう訳か無性に食べたくなる料理がある。それは単なる鶏のから揚げであってもどこか違う。特に前夜痛飲した土曜日、スポーツジムで汗をかき、サウナで一週間分のアルコールを出し切ってさっぱりとした気分の人に、体が欲するのである。

自由が丘には「居酒屋金田」、「ウナギ・ほさか」をはじめ、吞兵衛にとっては堪らない店が多いが、『ひな鳥のから揚げ・とよ田』は一味違う。後3ヶ月のひな鳥を丸ごと無駄なく使い、基本料理は砂肝、手羽、モモの単なるから揚げで、別に特別なタレやころもをつける訳でもなく、その「揚げ油の種類と調合」そして「揚げ方」

が勝負なのである。現当主は2代目で、先代の急逝でサラリーマンを急遽やめて先代の味を継いだ。

L字型白木のカウンターの一番奥、当主の揚げ場の真ん前が定位置で、大きな赤い煽りうちわを持って、汗だくであげる当主の姿をつまみに吞んで食らって楽しむのである。

「コースと胡瓜の古漬物（ふるずけ）と瓶ビール」これがいつものスターターオーダーで、お通しのオニオンスライス、砂肝、モモ、手羽そして最後のスープが、タイミングよく黙って出てくる。

先ず、渴いた喉に冷え冷えのビールをグイーと飲み干し、オニオンスライスと胡瓜の漬物でメインディッシュの出来上がるのを待っているのである。当たり前のよくあるオニオンスライスであるが、オニオンのサクサク感と程よいポン酢の味わいが秀逸なマッチング。

ひな鳥を高温に沸騰した特製調合油に愛おしそうに丁

寧に入れると「ジュー、ジャー・・・」と美味しそうな

音を立てて、油の中で踊っている。飛び跳ねる油を赤い

うちわで巧みに操っている。「ハイ・・・手羽です」と熱々

の揚げたてが、竹製籠のナプキンの上に載せられ、スイ

カ切の檸檬が添えられている。揚げたてをアチイチイ：

と注意深く両手で割き、塩と七味唐辛子を付けフーフー

言いながら頬張る。生後3ヶ月のひな鳥なので骨も柔ら

か、骨の髄までしっかりとしゃぶりつけるのである。

とよ田に通つてもう既に30年になるが、「あれーどこ

かで見た人だな・・・」と、直ぐ隣にいる人を改めて確か

めると、あの世界の王さんであったり、ファイティング

原田さんであったり：。。インターネットで「自由が丘・

とよ田」で検索すると、写真入投稿が満載で、あるプロ

グでは「・・・噂には聞いていましたが、やっと今日食べ

られました。・・・本当にこれは世界一のから揚げです。

感激！・・・」矢張り世界のチャンピオンたちが通う店は、

熱々のひな鳥割いてレモンかけ

酔宵子

本からのあれこれ(1) 米田文彦

自宅の廊下の隅にある書棚、その中の本の背表紙を眺めていると、この本はどのようなことがあってここにありなのか、いつ頃購入したのか、はつきりとその背景を覚えていられる本がかなりある。

ここに折角の機会を頂戴したので、そのような本を見たい出すこと、ばらばらめくって思いがつかないこと、などをいくつか書かせて戴こうと思う。

「唐詩選」

大学四年生の冬、学園は授業料値上げ反対闘争が盛んに燃え上がり、授業はほとんど行われず期末試験もレポート提出で代替される状況にあった。私は高校時代から始めていた弓道の部活動も秋のリーグ戦閉幕とともに終了し、ゆっくりしていた。その頃、高校のときの監督で初めからご指導戴いた細井英彦先生からお誘いを受け、同期の仲間数人とご自宅を訪問したことがある。

新宿区戸山の団地で、細井さん（と呼んでいた）の手

料理とお酒。私たちは二十歳を少し過ぎた頃でもあり、お酒は酒豪である細井さんがほとんど独り占め、そのうち本を出してこられた。

漢詩の本で、その頃出版された高木正一著「唐詩選・上」とあった。細井さんは飲みながら詩を読み上げ「いいねえ」、また飲んで読んで「いいねえ」が続いた。私たちは漢詩など知らず、何がいいのか解らなかつたが聞いていた。「いいのだろう」と思いながら。

やがて四月、そして会社員生活。私は初月給で「唐詩選・上」を購入した。冬のあの日の想い出が心にあった。今も裏表紙には昭和41年4月20日と書いてある。ただしそれを読み他の新書を買ってみたりしたのは随分後のことだった。

飲みながらの「いいねえ」から始まった漢詩のことなので、ここは好みのまま、酒の詩について書いてみよう。

酒を愛した詩人、その筆頭は李白とされる。杜甫は「李白は一斗、詩百編、長安市上、酒家に眠る。天子呼び来れども船上らず。自ら称す、臣是れ酒中の仙」と詠じている。白髪三千丈の世界とはいえ、相当なものなのだ

ろ。

山中の幽人と対酌す

兩人対酌山花開

兩人対酌して山花開く

一杯一杯復一杯

一杯一杯復一杯

我醉欲眠卿且去

我酔いて眠らんと欲す卿且去れ

明朝有意抱琴来

明朝意有らば琴を抱きて来れ

李白の豪快・風雅・天衣無縫の世界の詩として愛されている。

酒を愛する李白は酒を作る職人たちとも仲良しであり、酒作りのじいさんが亡くなったのを悼んで詩を作っている。「じいさんはきつと冥土でも酒を作っているだろう、しかし冥土に李白はいない、一体誰に飲ませるのか、寂しいだろな」という内容だ。

勿論、李白は大詩人である。望郷の詩をひとつ。

静夜思

静夜の思

牀前看月光

牀前月光を見る

疑是地上霜

疑うらくは是地上の霜かと

舉頭望山月

頭を舉げて山月を望み

低頭思故郷

頭を低れて故郷を思う

于武陵という詩人には次の詩がある。

勸酒

勸酒

勸君金屈卮

君に勸む金屈卮

滿酌不須辞

満酌辞するを須いず

花發多風雨

花発いて風雨多し

人生足別離

人生別離足る

この終わりの二行を井伏鱒二は「花に風のたとえもあるぞ サヨナラだけが人生だ」と訳した。

そして、漢詩には日本語読みでも名文句が多い。

李白には「蘭陵の美酒鬱金香 玉椀盛来琥珀杯」

王維には「葡萄の美酒夜光の杯」

いかにも美味しそうなお酒と素敵な盃ではないか。

「一杯一杯復一杯」である。

しかし、たくさん飲めば良いといのではない。白居易は飲む量が少ないことは気にしない、気持ちよくなれるのが良いのだ、とも言っている。

次は杜甫を再読してみたいと思う。

ある自然科学者の手記 (43) 大橋望彦

其処で、先ずは、知人を頼りに、静岡県の御殿場町の在に軒別荘が借りられたので、其処へ祖母と弟、妹二人を連れて、母が緒に移り、所謂疎開を致しました。姉と私と父が原宿に残り、父の面倒を見ることが成りました。ある時、私が御殿場に行っている時の事であります。下の妹が急に肺炎を起し、父と姉も駆けつけ、医者に診て貰いましたが、大した事はないと言うので、一まず安心して父と姉は、汽車で帰りました。未だ、父達が駅に着く否かの頃（駅まで徒歩二里）に、妹は引付けを起し、苦しがり、母は、芥子湿布を仕様にも其の芥子も無く、仕方なしにカレー粉を練つて胸に当てがいましたが、其の甲斐も無く、やがて息を引取ました。急いで上り列車の通る踏切まで走りまして、父達の乗っている汽車の来るのを待つて居りました。汽車はあつという間に過ぎましたが、丁度父達は此方を見ていて私を見つけて呉れましたが、私の帰れと言うジエスチャーは判らずに、手を振つて居ります。これ程もどかしい思いをした事は御座いませぬ。すぐすご帰りましたが、母は、泣き濡れて居りますし、直ぐに郵便局に走り、原宿の家に電報

を送り、直ぐ引き返すように手配だけ致しました。其の翌日の事で御座います。其の頃は報道が統制され居りまして、何処が震源かもわかりませんでした。東海沖の駿河湾の大地震がありました。地鳴りの凄音と共に、殆ど立つては居れない程の揺れ方で、母は、亡くなった妹の上に被さる様に庇い、私は、急いで、祖母を背負い、ヨロヨロしながら、裏の竹藪の中に逃げ込みました。やや落着くと、弟と妹も一緒に学校から帰つて来て、漸く皆無事で在つて、安堵致しましたが、汽車が来るか来ないかが心配でした。其の時私は中学二年生だと思いますが、咄嗟の事でしが祖母を背中に背負つて、何と軽いのかと思つたこと今でも忘れません。その内、我々の借りていた家が、陸軍の将校が接収するので、立ち退きをする様に言われ、已む無く、信州の南安曇郡に梓村と言う所が御座いまして、其処に母の従兄が居りますので、其処まで移転することに成りました。この再疎開は、全て軍隊の兵隊さん達が貨車から、トラックまで全て手配梱包、詰め込みも行い、私達は何もしないで済みました。その様な訳で祖母に見れば、戊辰の役の次に、又戦争により、田舎暮らしを余儀なくさせられる事と成つた訳で御座います。最早、祖母は、何も言う事無く、父のやる事に全てを托しているようでありました。然し、母の申すには、

祖母は極めて嚴格で、七十歳に成る迄は、家の御杓文字（主尊権）は、決して渡して呉なかつたさうで後座います。

三月十日の東京大空襲の時は、原宿の辺りも二面の火の海で、新宿渋谷も同時に全部灰と成つて仕舞いました。丁度其の頃、父が東芝電気(株)から新しく出来た西芝電気(株)の方に単身赴任することとなり、網干と言う、姫路から少し先の辺鄙な所でありましたが、長屋ばかりの社宅の中で、幹部丈は一軒家の社宅を借りることが出来ました。東京には居る事も出来ず、仕方無く、姉と私が、父の世話する事で網干に一緒に参る事となり、信州と網干の間を折りがあれば行き来すると言う生活が始まったので、御座います。

信州に移りましたが、祖母と相変わらず、針仕事か、人形作り、それでも暇だとトランプ占いを致して頗る元氣でありました。それに、母方の祖母、貫名紫子書道家、貫名海屋の曾孫）も疎開して参りましたので、丁度良い話し相手が出来たので御座います。

『祖母光子の趣味に就いて』

話しをズート戻しますが、祖母の会津若松から上京する前の事で御座います。此の自伝に御座いませんでしたが、直接、筆者が祖母光子より聞いた事で御座います。田名部

より会津へ帰り、御扶持も無くなつた頃、光子の母は、『もう年頃になり、之これからの女の生き方にどんな事が生ずるか判りません。貴女は独りで生き抜く為に、何か手に職を持つておれば、今度其が役に立つでしょう。其れには、丁度知り合いに髪を結つて居る方が居られます。其の方の所で髪結いの修行をして見てはどうですか。』申します。光子も直ぐに其の提案を受け入れ、髪結いの基本から習わせて頂く事となりました。何年か続ける間には、お店で働き、常連のお客様も付き、髪結い料の幾らか頂戴する事程にもなりました。其れも、特に大事な事には、御店で働くことの意味として、お店のお客様には、老若男女色々な方が見えます。それに、職業も色々な方が御座います。其の職業でもそれなりの流行もあり、粋な髪形やオーソドックスな髪型まで、其れは千差万別、現在のヘヤーサロンや、美容院と、理髪店と、髪結い床屋が全部混じつた状態でした。お客様の好ききらい言う事は勿論出来ず、全てマスターしないと成りません。此の修行が大変だつたさうで御座います。このような事が、後にどんなに役に立つたか想像すら出来ませんでした。だが、それは決して無ではございませんでした。

絹の話 (61)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

流出する呉服

【死蔵されている呉服の危機】

現在の日本の箆笥の中に大量の呉服が眠っています。その多くが戦後蓄えられた物です。

昭和40年頃までは絹の呉服は財産の一部として扱われて来ました。その頃までは各県に蚕糸試験場が有り、品種の管理、養蚕指導、新品種の開発、蚕の生理など蚕に関するあらゆる分野が積極的に研究され、絹に関する研究では世界のどの国より抜きん出た成果を上げていました。その頃には、絹見立てのナイロンが普及し始め、絹のアメリカ輸出も影を潜めてしまっていました。戦後の混乱が落ち着いて来ると、女性が労働市場に積極的に参入し始め経済力を持つて来ました。モンペから洋服へ、戦時中、焼けたり失った反物へのコレクションが急騰して来たのです。伝統的な染織物に加えて若い人に柄や色彩豊かで手の届く価格の銘仙などの商品が人気を博しマーケットを明るくしていました。

大手の百貨店の呉服部も柳行李に担いで各家々を回って販売に力を入れていました。今日で言えば高価なブランドの

洋服を次々に買うのに似ています。

いつか着よう！あの時着よう！と買い求めたものの、洋装で出かける事が多くなり、お金は稼いだけれど、仕事が忙しくて着物を着る機会がなく、箆笥の中にどんどん溜め込まれてゆき、今日では自分で着付けが出来ない子や孫の世代になってしまいました。譲り受けてから10年以上風も通さず仕舞ったままになっている人が大勢います。また古い家を立て替えたり、高層マンションに移転するとき収納場所がなく、整理の業者に一把ひとからげで信じられない安値で売ってしまう人も多くなって来ました。もはや呉服は財産的役割を失ってしまっています。

【再利用の着物】

そこで最近、中高年に静かなブームになっているのが、和服の洋服化再利用です。

コート、ワンピース、ベストなど様々です。中にはパッチワーク等の手の込んだ物もよく見かけます。

既製の物は呉服屋の店の奥やデパートの各地の物産展等でよく見かけられます。

和服の再利用には三つのルートがあります。

ちよつと変わって面白いと既製品を購入する人。もう一つは和服の古着屋でほしい反物や端ギレを買って自分で染

しんで縫製する人。

第三のタイプは祖母や母の大切にしていた思い出を大事にして、デザイナーのいる専門店に自分の希望デザインを相談して依頼する人などが有ります。

今や和服の古着屋は大いに繁盛しています。二束三文で仕入れた物をほどく手間はかかっても驚くほど安く売っています。帯等も袋物を作ると云つて多くの人が購入してゆきます。

専門店に持ち込まれる物には仕立てをしてない反物、かなり着こなされたものなど様々ですが、着こなされた物には特別な思い出や愛着が有る様ですが、使いたい所にシミがあったり、ほつれていたり、時には生地全体が劣化していて、どの部分をどのように使つて顧客の希望に添うようにデザインして仕立てるのはなかなか苦労です。仕立て希望の問合せは多々有りますが、仕立て代を考えると躊躇する人が殆どです。

特異な販売は増大する諸外国の観光客への販売です。観光客の和服への興味は意外に大きな物が有ります。一般の古着はそのままではあまり売れませんので、それ等を店頭に飾り、縫製費の安い外国でお土産用にハッピーユカタまがいの物を作り売っていますが、これが結構よい商売になっています。

結婚式で使った打ち掛け等はアメリカ人などがルームアクセサリーや気分転換の部屋着として買って行きます。

【日本の筆筒を守れ】

現在の日本全国の筆筒の中には膨大な量の絹製品が死蔵されています。

一般の方々の物が大部分ですが、茶の湯、お花、日舞等日本の伝統的諸事に携わつて来た先生方も二代目、三代目で廃業する方が増えています。この方々の筆筒の中が古物商にとつては宝の山なのです。

世界中の民族衣装の古典的価値のある物は洋の東西を問わず殆ど蒐集され尽くし、世界各地の美術館や蒐集家の下に集められてしまいました。

手付かずの国は日本だけです。

今や江戸末期から明治初期にかけて浮世絵が紙くずのように世界に流失して行つたと同じ状態になりつつ有ります。リホームして着るのもよいですが、もう日本で今後作れそうもない物、着物の変遷の転換点(素材、織り、染め)に当たる物、(庶民の生活着、野良仕事なども含む)等、見極めて風など通して大切に保存して頂きたいものです。

それ等は50年先には全く違つた評価を受けるだろうと思われます。それが文化を守る事の一環ではないでしょうか。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 五十一回

「月虹」 鮫島 満

二十四 金子阿岐夫 3

春の光くまなき小路を老ひとり掃き清めをり浅草日輪寺前

三筋町まで行進せむと声をかけ文明先生先立ち給ふ学びてまだ浅きわれにドイツ語の会話強ひにき病は癒えて

「茂吉二十三回忌」と題する一連中の歌。昭和二十八年二月二十五日に亡くなった茂吉の二十三回忌は昭和五十年に、明治二十九年に十五歳で上京して暮らし始めた東京・浅草でとり行われた。

二首目は法要が済んだあとのことであろう、「アララギ」の発行人である土屋文明が、少年茂吉が養子入りした斎藤家のあった三筋町まで歩こうと提案して先頭に立ったというのである。浅草は茂吉が青山に移ってからも足繁く通ったところであり、また、早くから茂吉を訪ねていた「アララギ」の歌人たちにとっても忘れることのできない街であった。

この年十二月には三筋町に茂吉の「浅草の三筋町なるおもひでもうたかたの如や過ぎゆく光の如や」(『つゆじも』所収)が歌碑として建てられた。

三首目は、作者が大石田において医大受験のために茂吉からドイツ語を習ったころのことかと思われるが、医家になってからのことかもしれない。茂吉は医学生時代はもちろん、三年余のドイツ留学もしていたから、若い作者を励ますことも少なくなかったであろう。

湖^{ウミ}をわたる風に松山の松にほふ茂吉忌を過ぎてはやしひと月 同

題に「鳥海山」とある。茂吉の二十三回忌に出席した作者は帰郷後鳥海山の見える湖のあたりに来てしみじみと茂吉のことを偲んでいるのであろう。

み墓べに実生のアララギ二三本見出でてうれし今年
の茂吉忌 同・昭和五十一年

右の歌の墓は金瓶宝泉寺の墓であろう。茂吉第三の墓が大石田に建てられたのはこの二、三年前であるからまだアララギが実を持つとはかぎらないと考えたい。

われよりも七歳若くりユック背負ひ茂吉先生に従ひ

き父は
従ひて長く歩みし日の遠く憩ひし杉の森はほろびぬ
同・昭和五十一年

一首目は、大石田滞在中の茂吉の散歩や旅行につき従っていた父の板垣家子夫は今の自分よりも七歳若かったのだと詠む。その茂吉が好んで足を運んだのは大石田の下河原であった。そのときにのことを板垣は、
あたたかき春日を避けて憩はれし沼べの杉生新芽ふきつつ
『磔底』昭和二十二年

と詠み、また、茂吉亡きあと、

病み後の体いたはり君来にしここの河原年々に荒る
『湧水』昭和四十三年
河原をもとほり憩ひ給ひける君が杉森の影恋ひて入る

と詠んでいる。この昭和四十三年の二首には、茂吉の愛した下河原が年々に荒れてゆくさまがうたわれている。

そして板垣はさらに、
遠き人を偲ばむよすがなき嘆き変り荒れ果てし下河原ゆく
同・昭和五十四年
と詠んでいる。金子もまた右の歌で、自らが茂吉に従った下河原の荒廃を嘆いているのである。

「一晩中苦しんで作歌してましたよ」輝子夫人はかくも語れり
『黄の光』昭和五十三年

茂吉書簡展めぐり見てロビーの椅子に凭れば蔵王は
すでに夕光の中

二首目からみて、上ノ山の茂吉記念館での「茂吉書簡展」会場での一コマであろう。輝子夫人が来ていたことがわかる。

今になほ在す思ひに玄関にわが立ちぬ童馬山房書屋
同・昭和五十四年

青山の脳病院跡「童馬山房書屋」を訪ねたときの歌。この前年にここには、茂吉の「あかあかと一本の道通りたり靈剋る我が命なりけり」（『あらたま』所収）を刻んだ歌碑が建てられた。作者はそれを見るために上京したのかもしれない。

ここに一夜宿りし茂吉先生を偲びつつ清き湯にひたりをり
同

湯田村（現鶴岡市）湯田川温泉での作。茂吉は大石田滞在中の昭和二十二年十月にこの温泉に一泊して、「湯田川に來りてみれば心なごむ柿の葉あかく色づきそめて」湯田川の湯をすがしめど年老いて二たびを來む吾ならなくに」（『白き山』）と詠んでいる。

楽しい時間 37

山本紀久雄

2015年10月31日

パリスの審判（1）

先日、久しぶりにニューヨーク・マンハッタンの玄関口、グランド・セントラル・ステーション、駅構内に1913年に創業したオイスターバー、その世界2号店である品川駅構内の品川店に行つた。相変わらず牡蠣好きが集まって賑わっているが、オイスターバーに行けば、牡蠣は生、ワインは白、これがお決まり定番である。つまり、生牡蠣を愛し、食する者は、牡蠣同様にワインについて関心を持っているはず。

そこで、今回はワイン世界、それもワイン業界の「二大事件」である「パリスの審判」について触れてみたい。

大事件勃発の始まり

ワイン世界で、1976年5月24日、大事件が勃発した。

それは、仏米著名ワインについて、ブラインド・テスト比較試験を行った結果、世界のワイン界を振動させ、当時のワインの常識をくつがえし、現在も語り継がれ、歴史をかえた事件である。

内容は、その場に居合わせた、当時タイム誌の記者だったジョージ・M・テイバーが「『パリスの審判』カリフォルニア・ワイン vs フランス・ワイン」に詳しく書き述べている。

「私は1970年代の中頃、タイム誌の特派員としてパリ支局に駐在していた。これは実に面白い仕事だった。小さい所帯の支局だったので、フランスの政局から最新フアッションまで、あらゆる記事を書かされた。パリ支局が担当する国で事件が起きると、どこでも駆けつけた」で始まる。

1976年5月24日は、たまたまパリにいた。1週間前、ニューヨークの編集者に、パリでバカバカしい試飲会がある旨は伝えてある。超一流どころのフランスワインが、名もないほつと出のカリフォルニア物と対決する趣向らしい。フランス勢が勝つのは目に見えているので、話題にならないだろうが、カリフォルニアで生まれ育つた私は、昔からワインに大きな興味があり、スイス、ドイツ、ベルギー、フランスで、学校に通ったり働きながら、ヨーロッパのワインをいろいろ勉強した。

試飲会場は、インターコンチネンタル・ホテルだ。シャンゼリゼ通り近くにオフィスを構えるタイム誌パリ支局から、それほど遠くない。

アメリカ大使館の前を通り、コンコルド広場にあるエジプト風オリベスク、通称「クレオパトラの針」を過ぎ、リボリ通りに入る。リボリ通りは、ほどなく、華やかに飾りつけた店が並ぶアーケード街に装いを変える。インターコンチネンタル・ホテルは、カステイリオン通りにあり、このリボリ通りと、重厚な雰囲気溢れるヴァンドーム広場に接している。パリで最高にスタイリッシュなホテルであり、品のよさと豪華さで、光り輝いていた。

ホテルのドアマンが、パティオの隣にある瀟洒で小さな部屋に案内してくれた。ここが試飲会場だ。

試飲会を企画したイギリス人のステイヴン・スパリユアと、アメリカ人のパトリシア・ギヤラガーとは面識があった。

スパリユアは、ホテルに近いワインショップ、『カーヴ・ド・ラ・マドレーヌ』のオーナーだ。ギヤラガーは『カーヴ・ド・ラ・マドレーヌ』の中で開校しているワイン・スクール『アカデミー・デュヴァン』の講師で、入門コースを受けたことがある。

この試飲会の取材に来たジャーナリストは私だけだった。私は、ギヤラガーに挨拶すると、茶色いプラスチックの表紙のメモ帳を手にも、取材を開始した。

間もなく、9人の審査員が現れた。個人的に面識ないが、9人とも高度な試飲能力を備えた、フランス・ワイン界を代表するトップ・プロだ。9人はフランス上流階級の作法に従って静かに挨拶を交し握手をすると、横に長くセッティングしたテーブルに着席した。

この試飲は、ラベルを隠す、いわゆる「ブラインド・テイスティング」なので、審査員はどのワインを飲んでいるか分からない。知らされているのはフランス・ワインとカリフォルニアが混じっていて、赤ワインは、カルベネ・ソーヴィニヨン主体のボルドー系ワイン、白は、シャルドネで作ったブルゴーニュ・タイプであることだけだ。

試飲会の結果IIパリスの審判 (白ワインのテイスティング)

ほどなく、3時を過ぎ、ラベルのないボトルを持ったウェイターが現れ、テーブルに沿って審査員のグラスにワインを注いで回った。審査員の前にあるのは、採点表、グラスが2脚、次のワインを飲

む前に舌の味覚を元に戻すための小さくて固いロール・パンだけだ。普通の試飲会と同じように、白ワインのテイスティングから始まった。

白ワインの試飲が半分終わった頃、手元のワイン・リストと見比べて、私は大きな衝撃を受けた。フランス・ワインをカリフォルニア物と勘違いし、カリフォルニアをフランスと思いついていて、審査員がいるのだ。テーブルの一方の端の審査員は、フランスと判断し、反対側では、同じワインをカリフォルニアと信じている。

試飲会が面白くなる予感がした。

スパリユアは、当初、試飲会の最後に全部の結果を発表する予定だったが、ウェイターがテーブルを片づけて赤ワインの用意をするのに時間を食い、スケジュールが大きく遅れた。そこで、白ワインの試飲結果をその場でアナウンスすることにした。スパリユアは集計結果を見て腰を抜かすほど驚いたが、そのままゆっくりとテイスティング結果を読み上げた。

- 1位 シャトー・モンテレーナ 1973年(米)
- 2位 ムルソー・シャルム・ルロー 1973年(仏)
- 3位 シャローン 1974年(米)
- 4位 スプリング・マウンテン 1973年(米)
- 5位 ボーヌ・クロ・デ・ムーシユ、ジョセフ・ドルーアン 1973年(仏)

何と二位にカリフォルニア・ワインが勝利したのである。大騒動の始まりである。以上。

楽しくマナー ⑥

辻 照子

「ワイン オープナー」

ワインは飲みたいけれど、コルクを開栓するのが、どうも苦手でという声をたびたび聞きます。

ある講座で失敗談として、コルクが途中で切れてしまいワインが注げず、仕方ないのでお箸でボトルの中に押し込みコルクがプカプカ浮いた状態のままサーブしたり、コルクがボトル口に崩れてしまい、困って茶こしを通してワインを注いだ等、おしゃれな雰囲気が出無しになったという経験を笑いながら話してくださいました。

手軽に手に入る、T型のオープナーの開栓のコツは

① オープナーの螺旋状になっている先端をコルクの中央にさし、真の直ぐにねじ込んでいきます。この時、曲がつて差し込んでしまいそうでしたらボトルをテーブルに置き、オープナーを上から押してボトルを回すとコルクの中央にスクリユアの先端が入っていきます。

② オープナーはきちんと最後まで入れます、差し込むのを途中でやめるとコルクを抜くとき先端が届いていない部分からコルクが切れて残ってしまいます。オープナーが斜めになったり、コルクの端に入ってしまうとコルクが崩れてしまい上手に抜けません。

③ コルクを引き抜くときかなりの力を要しますのでボトルを

左手でしっかり持ち肘を体につけ、右手でゆっくりオープナーを回しながら引き上げます。

ワインボトルを立てたまま保存しておくコルクが乾燥してオープナーを差し込んだとき崩れてしまい上手に開栓できません。コルクの崩れを防ぐだけでなく、コルクが縮んで空気が入って酸化しないためにもワインがコルクに触れているようにボトルを斜めにして保存します。

コルク開栓の時、ボトルの先端を覆っているシールを全部はがさないようにします。ワインを注ぐときグラスにボトルが触れないようにしますが、もしボトルがグラスに触れた時、グラスを傷つけたり、カチーンという音がするのをシールが防いでクッションになってくれます。

T型のオープナーではどうも上手に開栓できないという方は、最近はスクリユアキャップのワインも多く有りますし、また簡単に開栓できるオープナーがいろいろ有りますのでおしゃれにワインをお楽しみ下さい。



● ハンドルを一定方向に回すだけで、スクリユアがコルクをもちあげてくれるタイプ。シールカッターもセットになっているものもあります。

● スクリユアを入れて、上がってきた左右のウイングを引き下ろすとコルクが抜けるウイングタイプ。





●小さなナイフがついたソムリエナイフ。小さなナイフはシールを取り除くのに使います。

他にレバーを上下させるだけのレバータイプやボトルにセットするだけの電動タイプのオープナーがあります。

今回のレシピのソーメン寿司は蕎麦でもできます。中身を変えてバリエーションを楽しんでください。切り落としたそうめんの端の木綿糸を取り除き、素揚げにするとカリッとして美味しいです。

今回試飲したワインは、白ワインはシャトーフォンセラヴブランとシャトーオーマジネ、ボルドーブラン、赤ワインはドメーヌガレイス、メルローでいずれもフランスのワインです。

*チキンのレンジ蒸し

材料 (4~6人分)

もも肉2~3枚 A (塩少々 酒大さじ2 生姜・ネギ 千切り各少々) パセリ・トマト適宜
作り方

- ①鶏肉の皮目にところどころに穴をあけ、Aに10分以上漬けて耐熱容器に入れラップをしレンジ(1000W)2分に加熱し10分位蒸らす。
- ②そぎ切りにした①にパセリとカットしたトマトを添える。

*ごぼうのから揚げ

材料 (4~6人分)

ごぼう1本 A (酒大さじ1 醤油大さじ2 にんにく、しょうが 各おろし小さじ1) 片栗粉大さじ1 揚げ油 適宜
作り方

- ①ごぼうは5cm位の長さ三角錘に切り、水にさらし水気をとってジール袋に入れAとともに揉み込む。
- ②①の汁気を取り、片栗粉をまぶし170℃の油でカラッと揚げる。

*ソーメン寿司

材料 (4人分)

そうめん2束 のり2枚 卵2個 塩少々 かにかまぼこ2本 チーズ2本 きゅうり1/3本 大葉4枚 木綿糸適宜
作り方

- ①そうめんの片端を結び、束ねたもとを箸でさばきながらゆでて、水で静かにもみ洗いしてザルに広げてさます。卵に塩をいれて溶き、薄焼き卵を焼く。
- ②巻きすに海苔、薄焼き卵をしき、ソーメンの端を切つて広げ、大葉、かにかま、チーズ、きゅうりを細く切つて巻き、熱したフライパンで軽く転がし、海苔の香りと艶をだす。

「歴代天皇御製歌」(四十六)

賈名海屋資料館

「後鳥羽天皇」第八十二代・在位一一八三年(四歳)―一一九八年(十九歳)

後鳥羽天皇は、源平争乱のさなか高倉天皇の第四皇子と生れる。平安末期から鎌倉初期。平家は、安徳天皇と神鏡劍霊を奉じ、四国に逃れ、壇の浦の戦で宝剣は海中に沈み、神器無きまま天皇の元服の儀が行われた。

土御門天皇、順徳天皇、仲恭天皇、三代にわたり上皇として院政を敷かれた。

後鳥羽院は中世屈指の歌人であり、後代にまで大きな影響を残された。一一九九年代、盛んに歌会歌合など行われ、九条家歌壇、藤原定家、式子内親王、藤原俊成、慈円、寂蓮、藤原家隆…歌作は急速に進歩した。

藤原定家らに「新古今和歌集」を撰せしめ、隠岐に赴かれた後も自ら「新古今和歌集」の継を続行された。ご自身も二千首をこえる和歌を遺された。

僧、栄西が帰国し、「臨濟宗」を日本に伝えた。

春

○春ゆけば霞のうへに霞して月に果つらし小野の山みち

○風は吹くとしづかに匂へ乙女子か袖ふる山に花の散る頃

夏

○なにとなく過ぎこしかたの恋しきにこころともなふ遅桜かな

○夕立のはれゆく峰の雲間より入日すずしき露の玉笹

秋

○うす雲のただよふ空の月かげはさやけきよりもあはれなりけり

○秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎりすややかけ寒しよもぎふの月
冬

○この比は花も紅葉も枝になししばしな消えそ松のしら雪

○冬の夜のしののめの空は明けやらでおのれぞ白き山端の雪

恋

○風の音それかとまがふ夕暮の心のうちをとふ人もがな

○袖の中に人の名残をとどめおきて心もゆかぬしののめの道

哀傷

○なき人のかたみの雲やしをるらん夕の雨に色は見えねど

羈旅

○さびしさをいつより馴れてながらむらんまだ見ぬ山の秋の夕暮

伊勢

○万代の末もはるかに見ゆるかなみもすそ川の春の明けぼの

熊野

○くまの川くだす早瀬のみなれざをさすがみなれぬ波の通ひ路

述懐

○大空にちぎる思ひの年もへぬ月日もうけよ行末の空

遠島百首より

○暁の夢をはかなみまどろめばいやはかななる松風ぞ吹く

○冬ごもるさびしき思ふ朝な朝なつま木の道をうづむ白雪

雑草

夏目勝弘

ドクダミに葉を煮やし除草剤を三年前より使うよになつた。今ではドクダミは完全に屋敷内より絶えたが、他の雑草も見られなくなり、春一番に咲いたイヌノフグリ等が見られずなんとなく淋しい思いする。家の周辺の雑草を少し調べてみることにした。目に付いた草々は百十九種。そのうち在来種は三十六種、六十パーセントが外来種。千六百年代以降に日本に移入した草種を外来種として扱い、原産地調べた(雑草大鑑より)なお数字は家の周辺で調べた百九種から在来種三十六種を除いた七十二種。

原産地(米国十五種・ヨーロッパ十五種、ユーラシア、地中海、アフリカ、アジア、メキシコ、南米、台湾等)。

鑑賞用、牧草、食用が十種余りであとは不明のもの。移入の年代は、江戸時代以前七件、明治が十二件、大正三件、昭和六件、わかっているもの、千九百六十年に北海道でアメリカオニアザミが発見されている。

貿易の自由化が進み多くの国からの輸入が多くなると共に外来植物も多くなると思う。

三河アララギの短歌に雑草の歌があまり見られない、草の名前知らないためなのかとも思う。

萬葉集アララギの先人の歌人の雑草の短歌を書き出してしてみた。

すみれ

○春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける。

山部赤人(八一四三四) 正岡子規

○君が手につみし董の百董花紫の二たははや

○眞葛原なびく秋風吹くことに阿太の大野の萩の花散る

作者不詳(十一二〇九六)

○山のべににほひし葛の房花は藤波よりもあはれなりけり

つゆくさ(ツキクサ)

(つゆじも) 斎藤茂吉

○百に千に人は言ふとも鴨頭草の移るふ情われ持たためやも

作者不詳(十二一三〇五九)

○よこれたるおどろがなかに鴨頭草の花かまさかむ水ひきていなば

長塚 節

よめな(ウハギ)

○春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のウハギ探みて煮らしも

長塚 節

○由良川の霧飛ぶ岸の草むらに嫁菜が花はいや珍らしき

すべりひゆ(イハヒツツ)

○入間道の大家が原のイハヒツツ引かばぬる吾にな絶えそね

作者不詳(十四一三三七八)

○波の来るしばしの間耕してすべりひゆの朱の茎のこりたり

(少安集) 土屋文明

たで(タデ)

○わが屋戸の穂蓼古幹採み生し實になるまでに君をし待たむ

作者不詳(十一二七五九)

○秋草の千ぐさの園にしみ立ちてむらたかき八百蓼の花

伊藤左千夫

あかざ(外来種、ユーラシアより古い時代に侵入されたと考えられる)

○そこらくに藜をつみて茹でしかば咽喉こそばゆく春はいにけり

長塚 節

せぎしよう(北米より明治中期に移入)

○み吉野の滝の巖より採りて来し石苔を幾年か持ちて養ふ

(山谷集) 土屋文明

しろつめくさ(江戸初期・ヨーロッパより)

鹿兒島 寿蔵

○やはらかき白つめ草の生ひ敷きて城あところ夏ふけにけり

「氷魚」のことから (179) 岡本八千代

この間(十月十日)、テレビで、俳優の渡辺謙氏とドナルド・キーン氏の対話が写された。題名は「私が愛する日本人へ」だった。キーン先生(こうお呼びすることをお許し下さい)は、日本に帰化され、日本の歴史、文学の研究者で、現在は東洋大学名誉文学博士としても有名な先生であることは誰も知っていることと思う。先生の対話の中で私がメモしておいたことをまとめて載せてみたい。

△「私が愛する日本人へ」のテーマ

- アツツ島で2600人が自決した感動
- 日本人に興味をもち、日本の文章を解読する仕事につきたかった。20歳の時。

○源氏物語・枕草子・日記文学等研究。

- 日本人の魅力
- ・あいまいさ、余情、美しさがある
- ・はかなさ、弱さへの共感

・時代よって敬語の使い方がちがう言語が存在する。
— はかなさ。

・近代文学では、三島由紀夫、「金閣寺」 太宰治「人間失格」等々他。

このようなメモをとった私であるが、実は私も喜怒哀楽の感情に脆い人間のような気がする。が、これがはかなさとかとかあいまいさかどうかはわからない。——。

さて、子規は如何であつたらうか。借りてきた猫みたいに気の小さいようなところがあつたと言われたりしたという子規は、「い

かなる境遇にあつても楽しみの中に生きる人」といわれているではないか。

子規は、友だちと何か楽しもうとするウイットにも富んでいて、楽しい場面を作る人だ。

例えば、漱石は畏れ多い友(畏友)とか、誰々は「親友」とかと表を作つてみたりした。

愛友	細井岩氏	良友	武市庫氏
好友	太田躬氏	敬友	竹村鍛氏
益友	三並良氏	旧友	安長知氏
敵友	菊地謙氏	畏友	夏目金氏
人友	柳原正氏	親友	大谷藤氏
酒友	佐々田氏	温友	神谷豊氏
剛友	秋山真氏	賢友	山川信氏
郷友	勝田計氏	亡友	清水遠氏
高友	米山保氏	直友	新海行氏
少友	藤野潔氏		

(NHK・生活人新書坪内稔典・参考)

また、「お百度参り」とか言つて、親友の大谷藤氏と百日間毎日ハガキを交換しようとした。実さいは、七十回くらい続いて終つたらしい。この親友は、子規の大学予備門の同級生、大谷是空のことだった。

最初のハガキは子規が松山から大阪にいた是空に出した。「何して来んか」と是空は「叔母いねばすぐゆきます」という返事。叔母さんは入院中だつたらしい。子規は「叔母さん、いつ帰る?」と。親友らしい二人のハガキだ。二人の遊びのようなハガキ。私、今でもこんな会話のできる友達にはいるが。

編集室だより【二〇一五年 十月】

三河アララギ賞 足立晴代様

道真公遺徳忍びて詩舞まいて秋の夜すがを過す楽しさ

美しさのなから、磨き抜かれた技を次々披露される足立さん。詩舞のご様子も麗しく思い描きます。

○平成二十七年十月末を以て、三河編集を閉じ、東京編集室で、全ての作業を行います。本当に長い間、無償のご協力をいただきました。沢山の思いが巡ります。ありがとうございました。

○三河から発送されておりました。三河アララギ誌につきまして、そっくり東京で引受けましたので、皆様方には、何変ることはありません。今までどおりです。

○会費制を廃止しました。既納会費は返却致しませんが、これからは、会費のことはお考えにならず、思いの限り三河アララギをご利用いただきたく思います。

○「講読を希望される方」とは、これから新しく三河アララギを講読して下さることについてです。

○今まで「三河アララギ会員」として発送させていただいた、そのまま同じ部数で、今までどおりお送りします。支払の必要はありません。

長い間、父と母と大変お世話になりました。会費を払い続けて下さった皆様へ私からのお礼の気持ちです。

○「私の二首」について。

請求の原稿用紙はお送りしませんが、毎月の短歌の中から自選されて、二百字ほどの「私の二首」を、毎月の歌稿と一緒に送り下さい。沢山「思い」を伝えたいでしょう。

○「年賀・頌春」は中止。三河アララギ一冊まるごと「年賀」のつもりになって作製します。

○大変身をとげている大崎ビル街に、友人が「板前バル」をオープンした。お祝いに掛けた。板前風の日本酒に合う料理、ワインに合う料理。新鮮な魚、野菜、肉類…。オアシスをみつけた。

○なんだか懐かしい桜木町へ。横浜（港の見える丘公園等）の吟行。

赤い靴号に乗って↓山手本町通り↓カトリック山手教会↓
ベリック・ホール↓エリスマン邸↓榎亭↓外人墓地・資料館↓
港の見える丘公園・アメリカ山↓神奈川近代文学館↓
横浜地方気象台↓中華街菜香新館 美味であったこと。

○奥多摩の、おくてんぐの「曇華庵」の「海野次郎展」
銀座プロムナード・ギャラリーへ。

銀座四丁目交差点（三越前）↓三原橋交差点（歌舞伎座前）へかけての地下道シヨウウインドウに、大胆かつ繊細な「山水図」。素晴らしい。長い時間を一人占めさせていた。

○山岡鉄舟研究会「吉田松陰・東京のゆかりの地」

千住小塚原↓回向院↓小伝馬牢獄↓神田お玉が池↓松陰神社↓国士館大学↓豪徳寺

おぼろおぼろであった事々が、現実の姿で私に定着する。最後の飲み会の、それぞれのそれぞれをおもしろく聞く。

○四谷三丁目ヌーヴェルアバンセ。やまざさきれいこさんのシャソン・ライブ。今のこと、昔昔のこと…よみがえりくる美しい時を過ごした。

次の日、同じヌーベルアバンセ。松戸しのぶさんのシャソン・ライブ。今のこと、未来のこと、やさしいリズムにのって想

いを描く。温かい心になってゆく。

○目黒・雅叙園・八十八周年特別企画・暇屋崎省吾の世界にゆく。珍しい花・草・苔・天井に届く程の木々・季節ではない花々・季節のもの・羊歯類・ありとあらゆる植物が、豪華絢爛な数ある部屋毎々、ぎっしり詰まっていた。

○豊橋の飯村に祖母の家があった。母と祖母を訪ねると、次郎柿がいっぱいあり、「もつともつ」と、おねだりして食べた。巨峰を食べ続けたことも思い出す。

J A豊橋に次郎柿をお願いした。すぐ送って下さったから、毎日一個づつ食べる。「ガン抑制に効果あり」というおまけも付いていた。

○田端中学校オープンスクールに紛れ込んだ。田端中学の放課後「パソコン教室を使つての授業」の生徒になっている。このクラスの先生が、オープンスクールの20講座あるなかの「パソコン教室」を担当され、自分の考えを、「パワーポイントを使つて人に伝える」という勉強をする。私が「短歌で伝える」というプレゼンテーションをする役割という。パワーポイントの作製もままならぬけれど小学生・中学生の生徒達に混つてみて、自身の時代とのあまりの異なりに、心底興味をもった。さて！これからどうするか！

ことのはスケッチ(44) 今泉由利

『天田愚庵』 つづき①

愚庵、彼の希有な生涯を追いかけて、一年が過ぎた。

天照大神が、霊石山へ行宮された時の、二千年以上の時を経た和歌。

あしひきの やまへはゆかじ しらかしの すえもたははに
ゆきのふれしば

短歌、俳句がどのように繋がれてきて、繋いでゆくか。しつかり見定めようと思う。

戊辰の役が起こり、薩長が京の都を出発する、三條大橋で、太田垣蓮月尼は、彼女の心を託した和歌を真紅の短冊に書き、西郷隆盛に手渡した。

あだみかた かつもまくるも 哀れなり 同じ御国の 人
とおもへば (味方にも仇にも、同じ哀れを…)

隆盛は、これを受け、幕府と談判を尽くし、鉄舟らを動かす…徳川幕府は、無血のまま江戸城を明け渡すこととなった。

十五才で戊辰の役に直面し、父母妹を亡くした愚庵。

戊辰の役後、東京駿河台のニコライ神学校に入学、ここでの人脈から、山岡鉄舟の門下となる。

清国談判問題により、愚庵は警視庁に拘引され、数ヶ月拘留される。その獄舎で、万葉調歌人、丸山作樂と出会い、和歌を教わる。

古郷の城址を訪ね、愚庵はじめての歌を詠んだ。

吹く風は、問へど答へず 菜の花の 何処やもとの 住家
なるらむ

法律学校で国分青崖と同級生の陸羯南を知る。

鉄舟は清水次郎長に愚庵を託した。

富士裾野開墾、次郎長の伝記を書く。

陸羯南、国分青崖等、富士山に登ったことを知り、愚庵も富士山頂に立つ。富士山頂にて歌を詠んだ。

ふじがねに のぼりて四方の 国みるも まじふるさとの
空をたつねて

このところ詩吟を習得中。今、習っているのは

短歌 晴れてよし 山岡鉄舟作

晴れてよし 曇りてもよし 富士の山 もとの姿は 変ら
ざりけり

目で活字を見ることにも充分余韻を感じているつもりだった。けれど活字が音楽となり、自身の身体からの声で吟ずることにより、今までの平面が、大きく広がる立体となった。

鉄舟が、愚庵が、詠まれた状況に、私も一緒させていたたいっているような…泣きだしてしまえそう。

つづく

和菓子街道（110）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(6)

落合橋を渡ると、気賀宿に入る。気賀の関所は、東海道の新居の関所よりも取締が的緩かで、新居を避けたいがために姫街道を通った旅人も多かったといわれている。気賀には関所本番所の屋根や、関所防備のために設けられた要害堀が今も残っている。関所資料館もあり、再現された当時の関所の様子を詳しく見ることができる。

関所跡を過ぎて姫街道を進むと、しばらくして細江神社の杜が見えてくる。神社の裏手にある「犬くぐり道」は、江戸時代、地元の人々が関所を通過せずとも宿場に入入りできるようにと作られたお目こぼしの



獣として通る「犬くぐり道」

裏道だ。道の途中には筵が1枚た
らされており、利用者はその下の
わずかな隙間を潜って通り抜けて
いた。この道を通る時、人は獣に
なる。武士は決してこの道は通ら
なかったという。庶民の私は、もち
ろん潜ってみた。

ところで、気賀といえば「みそま
ん」だ。次回以降、この連載でも
気賀のみそまん店を巡って、味比
べをしてみようと思う。

お知らせ

△新年号の原稿は、十一月三十日(月)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月の原稿に同封して下さい。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。

振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いします。ことがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することが、できます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六一六一A
TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://imaizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美